
挾啓、我が息子よ（完全版）

イボヤギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拝啓、我が息子よ（完全版）

【Zコード】

Z5392M

【作者名】

イボヤギ

【あらすじ】

自分の下から巣立つていった息子。音信不通の彼を気遣い、手紙をしたためる父だった

昨年（2009年）実施されました「犯罪の出てこないミステリー大賞」にエントリーした分を【上】とし、一年経過した今回、新たに【下】を追記した次第です。byイボヤギ

拝啓、我が息子よ

今朝のニュースで、今日が立春だと知った。だが、あくまでも曆の上だけの話だ。当然ながら寒いに決まっている。天気予報も見たが、そちらの東京も同じ様なものらしい。本来ならば、ここで、風邪などは引いておらぬかと息子を気遣うのが父親という者であろう。だが如何せん、身体どころか、生きているのかさえ不明な人間に 대해서は、気遣う事すらできないのだ。

社会人一年目とは至極大変なものである事くらい、人生の先輩である故、十分に理解しているつもりだ。だが、電話一本よこしてくる時間も取れない事はなかろう。そこが、父は理解しかねているのだ。

そちらへは何度も電話したが、一度たりとも通じた為しがない。ここでは嘘など言う気は毛頭ない。確かに今は便利な世の中であるから、家の電話の料金が未納でも、父は少しも驚きはしない。しかし、いくらボケが始まつておろうとも、おまえの携帯電話の番号など聞かされた記憶はない。これだけは断言できる。無論、職場に私事如きで電話するような恥ずかしい真似なんぞも、さらさらする気もない。従つて、このように手紙をしたためている次第だ。まさかこの歳で、息子宛に筆を取るとは心底思わなんだ。

おまえの会社が、来月決算を迎える事くらいは知つてある。息子が勤める会社は、とかく気になるものだ。昨年の世界的規模の不況以来、急激に株価が下がっている事も確認済みだ。三百一十七円、これがおまえのところの、本日の株価だ。これでは、当然ながら営業であるおまえが日々発破をかけられているのは、想像するに容易い。この辺りは、たとえ老いぼれでも把握くらいはできている。実際に、世知辛い世の中になってきたものだ。まあ、文句を言つても始

まらぬが。

ぐだぐだと文句ばかり書き綴つてしまつたが、兎にも角にも、七年前に母さんが逝つてからは、この世で一人きりの親子のはずだ。こんな女々しい台詞なんぞを書く身にもなつて欲しい。

少しでも、この父に情愛を感じるならば返信願う。今更、電話での言い訳なんぞ聞きたくもない。礼には礼をもつて返す、これこそがいくら新入りとは言え社会人たるものだ。

思わぬ長文になつてしまつた。これにて筆を置くとする。くれぐれも、身体には注意されだし。

敬具

平成二十一一年一月四日

父

とある独身寮の一室。眉をひそめた一人の青年が、スーツのままベッドに腰掛けている。そしてその手には、今日届いたばかりの便箋が握られていた。封書の表を一目見た時から、差出人ぐらいはすぐわかる。これまで飽きるほど見てきた筆文字だ。

片手に缶ビールを持ったまま、それにひととおり目を通した後、青年はネクタイを緩めながら傍らの目覚まし時計に目をやつた。時は、すでに翌日へと移動している。それを確認し、大きく「一」、三度首を回した彼は、着ているものをその辺に脱ぎ捨て、そのままベッドへと潜り込んだ。

その時、便箋が本人の気持ち同様、揺れながら床へと落ちていった。

拝啓、我が息子よ

思ったとおり、春とは暦の上だけの話だつたようだ。これで本当に我が星が温暖化に向つてゐるとは、父には俄かには信じられぬ。さて、時の経つのは誠に早いもので、もう一月十一日になる。今か今かと首を伸ばしてゐる間に、すでに一週間が経つてしまった訳だ。しかし、どうやら待ち人来たらず、とみた。

月並みな言葉で誠に恐縮だが、子供はいくつになろうと子供なのだ。おまえも、親になればわかる。まあ、そのじろには、こちらは爺になつてボケてるかも知れんが。

ここからが本題となる。几帳面なおまえの事だ、手紙には田を通してゐると思う。それでも返事をよこさないとこりをみると、相当に忙しいのか、はたまた軽んじているのか、このいづれかであろう。前者である事を切に願うところだ。何に忙しいかまでは、遠く離れたこの父にはよくはわからぬ。まあ、元々が眞面目にできているおまえのことだから、女なんぞに現を抜かしているわけでもなかろう。別に長文を欲している訳でもなんでもない。僅かの数行でも一向に構わないのだ。ここを誤解なきよう。要は返信する氣があるか否か、たつたこれだけの話だ。

但し、俗に言つ、便りがないのは良い便りなど、もはや通用しない事を肝に銘じよ。残念ながら、父はそこまでは人間ができてはない。これは、おまえもよく知つてゐるはずだ。

ぐぢいのは性分に合わないので、今回を持つて最後としたい。いいな、今回だ。僅かでもこの父の事を思つのであれば、たつたの数行でよい、とにかく返信せよ。

では、この辺りにしておく。身体だけには、引き続き注意する事

だ。

平成二十一一年一月十一日

敬具

父

先日同様、ベッドに腰掛けたまま、青年が新たな便箋に目を通している。時刻も、そう変わらない。唯一異なるのは、片手にあるのが缶ビールではなく煙草だという点だけだろうか。おそらく、もうすでに、十一分にアルコールが染みついているのだろう。

だが、ここからの行動は、前回と大きく違っていた。彼は、読んでいるうちに突然笑い出したのである。それも所謂、馬鹿笑いとまで言えるくらいに、だ。十数秒もただひたすら笑い続けた後、さすがに息苦しくなったのか、彼は一つだけ深い溜め息をつき、着替えもする事なく机へと向った。そして、その上に飾つてある母親の写真を一瞥し、ここにきてようやく傍らのパソコンを開いたのである。

相変わらず寒い日が続いているますが、体調の方は如何なものでしょうか？　まあ手紙を読む限りは、お元気そうですが。

今回は、父さんにいろいろと心配をかけて、本当に申し訳ないと思っています。父さんが手紙に書いていたように、会社の業績がこのほか不振で、さらに来月が決算期という事もあり、しおつちゅう上司にケツを叩かれている始末です。やはり社会人とは学生時代とは違つて、そう簡単にいくものではない、このように痛感してい

る次第です。

父さんの言ひように、最初の手紙が届いた時には、返事を書くぐらいの時間はありました。しかし、その時は精根尽き果てていたので、すでに机に向ひ気力もなく、早々にベッドに潜り込んでしました。本当にすみません。

わが社では、毎年三月末の決算終了時に恒例の打ち上げ会が開かれるのですが、実は上司から、この幹事役に任命されました。今は、私がいる営業部門が会の担当らしいのです。現在営業部門には三十人ほどいますが、その中から幹事役には、私含めて四名が選ばれた次第です。もちろん、全員が社会人一年目の下っ端です。一年生には何かにつけお鉢が回つてくるので、父さんの言ひどおり、もう嫌になるぐらい忙しいです。

それだけならまだしも、その後、他の三名が「レポートアクション」に見舞われてしまいました。

その中の山村という男は社用で大阪に出張していたのですが、大阪駅構内でエスカレーターの下りに乗っている際に、突然後ろから体当たりされ、下まで転げ落ちたそうです。想像するだけで、何とも恐ろしくなる話ではあります。そのぶつかってきた中年の女性とは、すでに示談が成立しているようですが、その際に負った打撲が全治一週間との事で、こちらに戻ってきた今でも、定時後は毎日近くの病院へと通院しているようです。本人曰く、時間に余裕があつたので右側を空けていた、との事ですが、いつ何時不幸なんて訪れるのか、わかつたものではありません。しかし、それにしても大阪という町は怖い所です。

次の川田という男は、近くにある実家が全焼したとの事で、その見舞いの為、やはり定時になるや否や、さっさと退社しています。何でも実家というのがマンションの五階らしいのですが、ベランダ

に面した部屋に置いてあつたお父上の老眼鏡が原因とかで、近くにあつた新聞紙から出火したらしいです。詳しく述べませんが、それにしても、とても信じがたい話ではあります。そして、知らせを聞いた消防車が駆けつけた時には、すでに手が着けられない状況で、隣まで被害が及んでいたとも聞きました。その際にお父上は脚に火傷を選び、今も入院されているらしく、代わりに本人が、その後の弁償等に関して保険会社との話し合いをしている最中、との事です。

そして、谷中という男です。これまた風変わりな事件に巻き込まれたようで、日々、定時が来ると同時に、彼もまた会社を飛び出して行きます。その行き先は、噂によりますれば、どうやら警察のようです。何でも、どこで手に入れたかは本人も不明との事ですが、いつのまにか自分の財布の中に偽札が混じっていたらしいです。

うちには、父さんも知つてのとおり印刷関連会社でして、いくら一年目の社員とは言え、その真偽の見分けぐらいはつきます。彼は、その偽の一円札三枚を持って銀行を訪ねたらしく、そこで本人の予想どおり偽物だと断定され、警察に行くよう指示されたとの事です。

しかし警察では偽札は没収され、しかも、謝礼金の一つも出なかつたようです。正直に届けたのにこれでは納得いかないという理由で、日々警察詣でをして、三万円だけでも返してくれるように頼み込んでいる、と彼は言っています。実際に、それだけの損失ですから当然といえば当然の話です。確かに、不謹慎ですが、黙つて使っておけばよかつたという訳です。

以上の三名の様々な理由で、結局は私一人で幹事の仕事を行う羽目になり、毎日定時以降、こうやつて場所探しにあちこち奔走している次第です。毎日、寝る為だけに帰宅しているようなものなのです。

思つにどれもキナ臭い話なのですが、嘘だと断定できるほどの知

恵も経験も、生憎持ち合わせていません。嘘とわかり次第、上司に報告するつもりではあります。

言い訳がましくなつて、すみません。一応なりとも元氣で生きていますので、どうか心配されないよう。

では、これにて失礼します。父さんも身体には十分注意してください。

なお都合がつき次第、母さんの墓参りの為にそちらへ戻るつもりです。何しろ、一字だけとはいへ、名前を譲り受けますので。

敬具

一月十四日

洋平

追伸

パソコンによつて打ち出された文字、どうぞお許しください。

拝啓、我が息子よ

これを三寒四温と言つのだらうか、無駄に年輪だけを重ねてきたせいか、父にはよくはわからぬ。ただ、気温の変化について行けないのは、まさしくその年論のおかげだ。皮肉なものだ。どうも昨日から熱っぽいようだ。人に注意しておきながら、何たる不甲斐なさだと、つい思つてしまつ。

今朝、郵便受けを覗いて、年甲斐もなく小躍りしてしまつた。よぐれ忙しい中、返事をよこしてくれた。まずは、礼だけは言つておく。ああ、パソコンでこしらえた文字だらうと一切気にはしていな

いから、この点は安心してよい。

早速中身を読んだが、どれもが稀有な内容の話で、唯々驚くばかりだ。おまえの書いているとおり、そのどれもがキナ臭くはあるが、仮にこれが事実だとすれば、誠にお氣の毒と言つほかなかろう。

昨今はパソコンなる便利な辞典がある故、この父でも、様々な事柄を今更ながら知り得る機会がある。誠に有難い事だ。人差し指一本だけの心もとない操作ではあるが、時間の余裕があるので、何ら支障は感じない。加えてこの歳になると、狭いながらも相応の人脈もある。それらを駆使して、おまえの同期三名の不可思議な話を、勝手ながら吟味してみた。親馬鹿と、笑えれば笑え。

まずは山村なる青年の話だが、父も、かつて関西にて数年生活した経験がある故、これは理解できた。

東京では、エスカレーターを利用する際、急ぐ人らの為に右側を空けるのが一般的だが、こと関西に限っては、逆に左側を空けるのが常識となっているのだ。理由については、あれこれ言われてはいる。が、どれも決定的なものではないようだ。よつて、先を急ぐ気の荒い大阪のオバチヤンがぶつかってきたとしても、何ら不思議ではないと思う。だから事実だ、と言つておるのではなく、あながち嘘ではないかもしれない、と言つておるのだ。誤解せぬよう。

次の川田氏についてだが、これは近くにある消防署の懇意にしている署長に確認してみた。おまえも知つてはいる、あの海原さんだ。いかにも、古き時代の探偵小説にでも出てきそうな話だが、驚くなかれ、我が国においても実例があるらしい。彼が言うには、老眼鏡やら水槽やらのレンズ状のものが発火源になりやすいようで、太陽の高度が低く、部屋の中まで光が届く冬場が特に危ないらしい。よつて、先の話同様、これまた嘘とは言い切れないのだ。人間、普通

はそこまで考えて生活なんぞはない。仮に事実であれば、やはりお気の毒な話である。

最後の、谷中なる男の話に入る。これもまた耳にした事がないような内容だが、パソコンで調べた限りは、まんざら嘘でもないようだ。

かれこれ三十年ほど前に出来た制度によると、警察に持ち込んだ偽札と同額程度の謝礼金が支払われるとなつておるようだ。だが、この謝礼金なるやつが味噌で、すでに解決した事件に関わる偽札に対する対しては、どうやらそれは支払われないらしいのだ。

この谷中氏の話が事実だとすれば、彼が提出した偽札とは、解決済みの事件に関わったものだ、となる訳だ。

以上により、これら三つの話の信憑性については定かではないが、嘘とも断定できないのだ。今思うに、言い訳に使うのであれば、このような、いかにも嘘っぽいものなどは、普通は口にしないのではなかろうか。世の中には、もつと嘘っぽい嘘も五万もある筈だ。

しかしながら、最も嘘をついている可能性が高い人物がいるのも事実だ。これをしたためている最中に、遅ればせながらも、ようやくこの事に気づいた。

ちなみに、今更言つには及ばんが、おまえの勤めている会社は個人経営なんだではなく、他人様の金によつて成り立つてゐる会社だ。業績が悪く、ここまで株価が下がれば、株主らに何を言われるやわからん。決算前のこの大事な月、特に営業部門は、おまえも書いていふとおり一円でも多く拾つよう発破をかけられている筈だ。それを、一月半も先の打ち上げ会なんぞに、意を注ぐだろうか？ 打ち上がるかどうかもわからん時期に、だ。ましてや、いくら一年目の社員とは言え、この重要な時期に、四名もの営業マンが定期に退社できるとも思へんのだ。とりわけ、会の幹事役の遂行などいう戯け

た理由で、だ。

親馬鹿かも知れぬが、それなりに賢いおまえの事だ。この父の言わんとするところが、すでにわかっていると思つ。それにしても、どこから探してきたなどとは聞く氣も起らぬが、なかなか興味惹かれる話だった事だけは認めよう。

またしても、長文になってしまった。これでは、熱も下がるまい。おまえもこうならぬ様、深酒なんぞせず、せいぜい健康には気を配る事だ。

では、これにて筆を置くとする。

敬具

平成二十一一年一月十八日

父

追伸

一つだけ言つのを忘れておつた。再来月の四月に母さん、おまえに自身の名前を託した洋子、の七回忌を執り行つ予定だ。誠に、時の立つのは早いものだ。だが、心配は無用だ。今更、になるやも知れぬが、この父と身近な親類とでしっかりと供養をする故、多忙なおまえは戻る必要はない。ならば六年後の十三回忌、いや、この父の目の黒いうちは、一切故郷に足を踏み入れる事はまかりならん。これを肝に銘じておくよつ。

こつものよつてベッドに腰掛けたまま、たつた今便箋を読み終えた青年。今宵も、今日と明日の端境期である。そしてその顔といえは、口元を片方だけ上げて笑っている。この内容のどこが面白いのか、前回同様、とにかく笑っているのだ。

「はははは、今更になるやも知れぬ？ 今更、に決まつてただろ！」

今夜は酒も煙草も口にする事もなく、彼は少しだけ皿をつむった後に机へと向つた。そして、これはいつもどおりだが、まずは母親の写真に手をやつたのである。

拝啓、父上様

この手紙を書くべきかどうか、本当に迷いました。まずは、この事を言わせてもらいます。

早速、本題に入らせていただきます。
さすがに父さんですね。すべてお見通しです。

仰せのとおり同期の三名につきましては、その名前は元より、逸話に至るそれら全でが、古き時代の探偵小説からの抜粋でも何でもなく、実際のところは私の創作の賜物でした。良い思いつきだと自惚れていたのが、何だか恥ずかしくなります。お忙しい中を、それら全てに關して裏まで取つていただき、心より恐縮している次第です。それと差し出がましいようですが、探偵小説なる言葉は、現代においては全く使用されなくなつた所謂死語ですので、あしからず。

さて、文面を拝見させていただくがぎり、かなりの立腹のよう

ですが、その前にお聞きしたい点もあります。

何故、息子がここまでして実しやかな嘘を並べたのか、おわかりですか？ 聰明なる父さん故、『理解していると思いきや、どうやら買いかぶりした模様ですね。ここが不思議でなりません。どうぞ、胸に手を当てられて思い返してみてください。私が知らないとでも思われたのでしょうか？』これでも父さんの息子です。数年前までは、親子三人同じ屋根の下で暮らしていたはずです。もちろん全部とは言いませんが、おおよそはわかっているつもりです。

母さんを長きに渡つて裏切り続け、よくも他の女性とお付き合いをされたものです。いや、今も現在進行形かもしませんが。いちだつて、おかげ様でもう立派な大人です。裏ぐらには取れます。そして、それによる心労が重なつて、母さんの病が進行したものと私は確信しています。その辛い姿も何度となく、この目で見てきました……そうです。あなたは、私の一番の宝物を奪つたに他なりません。私は、母さんのことが、今でもこの世で一番好きです。本人はすでにあの世でも、です。名前の一部を譲り受けたから？ いえいえ、そのような薄っぺらな感情では断じてありません。仮に、あなたの名前を譲り受けたとしても、私にはそこまでの思いは持たないでしよう。いや、持つはずもありません。

それにしましても、久しぶりに馬鹿笑いをさせていただきました。今でも、思い出すたびに腹の皮がよじれてくる思いです……元々が眞面目にできているおまえのことだから、女なんぞに現を抜かしているわけでもなかろ？……原文のままで。有難うござります。そのとおり、幸いにも誰かさんの血を引いておらず、ホッと胸を撫で下ろしている次第です。

多少理屈つぽくなりましたが、予想を超えて長くなりました。ここに、お詫び申し上げます。要は、顔を見たり、声を聞いたり、一切それらをしたくないくらい、あなたのことを恨んでいる、という事に他なりません。

四月の母さんの七回忌ですか。どうぞ、そちらにお任せします。
形だけのもので天国の母さんが喜ぶ訳がない、いつも血食しております。
ですから、どうぞ私のことは気にされる」となく、七回忌の法要を心ゆくまで催してくださいませ。朝晩毎日、私なりに、そちらで心を込めて供養いたしておりますので。

それから、田の黒い内は戻つてくるな、ですか。どうぞ、これまたご心配なく。たとえ、田が白くなろうとも、金輪際そちらへ戻る気なんぞござりませんから。

では、これにて失礼します。くれぐれも、お風邪などをおそれませんよ。

敬具

一月一十一日

洋平

追伸

そういう、申し訳ありません。一つだけお願いがありました。ものはや私のことを息子だ、などと思わないでくださいませ。こちらも父親だ、とは思つておつませんので。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5392m/>

挾啓、我が息子よ（完全版）

2010年10月9日18時40分発行